

# FWU

MAGAZINE

福岡女子大学広報  
No.119 | 2023  
SPRING  
創立100周年プレ特集号



未来を拓くなでしこの花  
100th—2023  
FUKUOKA WOMEN'S  
UNIVERSITY



特集

「書肆侃侃房」田島安江代表 インタビュー  
地方から出版の新風「夢を諦めないで」

100年に想うこと

衛生器具設備のこれまでとこれから

環境科学科 教授 豊貞 佳奈子

映画という欲望の100年間

筑紫女子学園大学 教授(元福岡女子大学 WJC非常勤講師) 一木 順



公立大学法人  
**福岡女子大学**  
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1-1-1

Tel.092-661-2411(代表) Fax.092-661-2420

<http://www.fwu.ac.jp/>

福岡女子大学広報 No.119 / 2023 SPRING

編集発行 福岡女子大学 戰略企画センター

2023.3 発行

新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、インタビュー、イベント時には手の消毒・マスクの着用を徹底し、換気を十分に行なうながら実施しています(写真撮影時のみ、マスクをはずして撮影しています)。

## 遠いサバンナ

田島  
安江

撮影 田島安江／撮影地 モンゴル

夕日がはじけ

草原に稻妻が走る

稻妻は火を生み

見渡す限りの草原は炎で焼き尽くされる

そのあとは

草木が芽吹くまでじっと待たねばならない

餓死するか

待てるか

瞬く間に日が翳り

草は芽を吹き

草原は緑で覆い尽くされていくはずなのに  
わずかな時間の裂け目を待てずに

旅にでる動物たち

遠いサバンナ

旅はゆっくり歩くのがいい  
風が吹き抜けるのを待つて  
そつとつぎへ進む

風はとつぜん

はるか遠くの海から吹き上ってくるから  
青い海のふちをぐるりと辿り  
ゆるゆると動く

わたしのサバンナ

夜になると少しずつ空気が冷えてくる  
空から舞い降りてきた翼のとがった鳥  
鳥はわたしの背骨に飛びのる

旅する姿勢になる

『遠いサバンナ』(書肆侃侃房)より

## Contents

### 特集

- 03-06 「書肆侃侃房」  
田島安江代表 インタビュー  
地方から出版の新風「夢を諦めないで」

### 100年に想うこと

- 07-12 衛生器具設備のこれまでとこれから  
環境科学科 教授  
豊貞 佳奈子
- 13-18 映画という欲望の100年間  
筑紫女子学園大学 教授  
(元福岡女子大学 WJC非常勤講師)  
一木 順

19-20 創立100周年の歩み

21-23 FWU TOPICS／成果報告

24 お知らせ(人事消息／公開講座)

25 編纂の寄り道

26 福岡女子大学100周年記念事業



【裏表紙】1929年頃  
正門にて撮影



この須崎(キャンパス)の正門はおそらく明治33年に設置されたもの(福岡県立女子専門学校開校前の内務省土木監督署時代から使用)。戦時中の金属供出により門扉の部分は失われたが、本学が大学に昇格し、香椎に移転するまで活躍し続けた。

(「専4文卒業アルバム」より)

田島 安江 [1945年～]

大分県生まれ。本学家政学部家政学科を卒業。  
地方公務員、出版社勤務を経て2002年に出版社「書肆侃侃房」(福岡市中央区)を設立。  
代表兼編集者であると同時に自身の著書『もう一冊のゆりちかへ』(幻冬舎文庫)、  
既刊詩集『遠いサバンナ』等も出版する。

# 地方から出版の新風

## 「夢を諦めないで」



「書肆侃侃房」代表  
たじま やすえ  
**田島安江さん**

1945年大分県生まれ  
本学家政部家政学科を卒業(大学15回生)

### 書肆侃侃房のあゆみ

田島安江さんは1989年編集プロダクション「システムクリエート有限会社」を福岡市博多区に設立。92年田島さん自身の詩集出版の際に「書肆侃侃房」の出版社名を使用。書肆は書物を出版・販売する店の意、侃侃は「侃々諤々」から取った。2002年、同市中央区に書肆侃侃房を設立。以来、21年で小説や詩集、短歌・俳句集、エッセイ、ノンフィクション、紀行など約670冊を出版。文芸誌「たべるのがおせい」「ことばと」を発刊。「たべるのがおせい」に掲載した今村夏子さん、宮内悠介さんの作品が芥川賞候補に選ばれて話題を呼ぶ。同社刊行の作品は現代歌人協会賞や川端康成文学賞など多くの賞を受賞している。従業員は8人。

### 海外文学から女性の自立学ぶ

#### ー幼少から中学・高校までどのようにお過ごしでしたか?

大分県の国東半島のつけ根にある速見郡立石町(現・杵築市)で育ちました。兄と姉、弟との4人きょうだい。父は大阪で教員をしていましたが、戦災で焼け出され故郷の大分に疎開して小学校教員を務めました。父から何か教えてもらつたことや勉強しろと言われたことはなく、のんびり育ちました。

幼少期は体が弱く、よく熱を出して学校を休み、布団の中で少女雑誌を読んでいました。近所には本屋さんがなく、中学1年の時に父が『赤毛のアン』と『アンネの日記』を誕生日にプレゼントしてくれたのが本との出会いです。家では勉強せず、試験は一夜漬けでしたが兄が通っていた県立杵築高校に進学できました。通学の汽車は2時間に1本しかなく、午前6時25分発に間に合わなかつたり、積雪で列車が運休したりしたら休み、そのためクラスでついたあだ名は「山間部」でした。

高校時代はまだ体が弱く、家では寝てばかり。宿題は毎朝学校で済ませました。その時期に読んだ『風と共に去りぬ』で最後に主人公が言つた「明日は明日の風が吹く」は心に残つた言葉です。自立した女性の生き方を教えてくれましたし、その頃から「家を出たい」と思うようになりました。

#### ー本学を進学先に選ばれた理由をお聞かせください。

文系の大学に行きたかったのですが、親から「文系の大学なら大分にある」と言われそのままに決断しました。

数学が大好きだったので、父から「何か身についた方が良いので、進学するなら国公立の薬学部が家政科」と言わされました。理系の履修科目の関係で薬学部はあきらめて家政科を受験。

福岡女子大を選んだのは、校舎から海が広がつて



### 「疑問を持つ」「継続」「つながる」を学ぶ

#### ー本学でどのような学生生活を送られましたか? 教員や同窓生との思い出や出来事を教えてください。

いるのが見えて、盆地育ちの私にとって明るいイメージが心に残つたからです。学科では食物を専攻する人が多かつた時代でしたが、人と同じことをするのがいやな私は被服を選びました。ただ、親は授業料以外を出してくれなかつたので奨学金と家庭教師のアルバイトで学生生活を送りました。

入学してすぐの授業で先生から「海の色は何色?」と聞かれました。通常、水色と答えますが、実際に海水をすくつてみると透明なのです。思い込みは駄目で、何事も疑つてみることの大切さを教えられました。

4年次の卒論テーマは「染色学」。年間を通してい草への染料浸透度を調べました。条件を変えることでの変化など、継続することの大切さ、継続によって何かが形として残ることを学びました。

もう一つは、人とのつながり。自然に人とのつながると何か実を結ぶことがあります。やりたいことをいつも頭に思い描いていれば、いつか出会える、何事も諦めないで続けることが大切だと学びました。今の出版の仕事も人のつながりを大切にしています。

学生運動が盛んで授業ボイコットなどもあった時代。サークルで文芸誌を作ったり、セツルメント運動(貧困地域への移住・支援)に関わつたり、三池炭鉱の炭じん爆発(1963年)後の大牟田市に行つたりして社会を学びました。2段ベッド4人部屋の寮生活やボート遊びで見た夜光虫の美しさ、九州大学など他大学の学生との行き来や交流などたくさん思い出があります。

本学家政部家政学科(当時)を1968年に卒業した田島安江さんが創業した出版社「書肆侃侃房」(福岡市中央区)は、地方の枠にとらわれずに著者を発掘紹介し、柔軟で自由な出版姿勢が東京中心の業界に新風を吹き込んでいます。アジアや欧米の現代文学を翻訳出版するなど海外にも目を向け、昨年は優れた活動を行つてある出版社を顕彰する「梓会出版文化賞」を受賞しました。同社が経営する天神の書店「本のあるところ」ajirōで、田島さんに幼少期や本学在学中の思い出、卒業後の歩み、本学の学生へのメッセージなどをうかがいました。



聞き手・庄山茂子副学長

本学の家政学部卒業後、奈良女子大学大学院修了。九州芸術工科大学大学院修了。博士(芸術工学)  
環境科学科 教授。

## 力ナダで2年の海外生活

### 一卒業してから、書肆侃侃房を創業されるまでの経緯をお聞かせください。

大学卒業時、家政学科出身は教員か公務員になる人がほとんどでしたので、在学中に生活改良普及員の資格を取つて大分県庁に就職。農政部で仕事をしましたが、屋外で泊まりがけの仕事が多いうえに、周りから「結婚しろ」と強く言われていたので、思い切つて2年でやめて福岡市の出版社に転職しました。その出版社は仕事がなく、印刷会社や広告代理店に出向させられたのがオフセット印刷や写真撮影を学ぶきっかけでした。

その後、大学教員だった夫と結婚し、夫の赴任先である北海道やカナダのオタワで生活しました。英語は全く話せませんでしたが、「スピーカー・スローリー」とか言つてやりとりしていると何とか英語に慣れて理解できるようになります。

子ども2人を授かり、家族4人のカナダ生活2年を終えて福岡に戻り、子育てから徐々に解放されると、以前からの夢だった本づくりの仕事がまたなりました。フリーで校正やライターをしているうちに旅行関係の本をつくり、書肆侃侃房設立へつながっていきました。当時57歳。同級生が「さあ遊ぼう」という年代になつて本格的に仕事を始めました。

### 探し求めるといつか出会える

#### 一本を出版される上で大切になさっていることを教えていただけますか?

著者とは出来る限り会つて打ち合わせをすることにしています。



コロナ前は全国どこでも、たとえ海外でも会いに行つていました。物を書く人はこだわりが強い。自分の本が売れると思っていました。思い込みだけでは駄目で、会うことによって書く人の「背景」が見えます。どんな町でどんな暮らしをしているのか?さらに話合うことによってより良い方向が見えてきます。私自身、迷うことも多く、話しながら考えています。

例外はノーベル平和賞を受賞された中国の劉曉波さん(2017年死去)。ご本人が投獄中でお会いできなかつたので、詩集『牢屋の鼠』は香港の出版社経由で版権を買って中国人の翻訳者に確認しながら、辞書を引きつ何とか翻訳して出版にこぎつけました。彼が住んでいた北京にも足を運びました。表紙の写真も私の撮影です。新聞で劉さんの詩の一編を読んで衝撃を受け、ぜひ出版したかった本です。第二詩集の『独り大海原に向かつて』と劉さんの妻、劉霞さんの『毒薬』も多くの方に読んでいただきたい本。探し求めるなどを諦めないといつか出会えるものです。

### 一出版された本の中でお薦めの本をご紹介いただけますか?

テレビや新聞で取り上げられ、文庫化、ドラマ化された『ゆりいちかへママからの伝言』(テレビ二晃子著)は、がんに侵された著者が幼い娘に自分の思いを書き残した1冊です。

## 出版界は地方の時代

### 一東京でなく福岡という地方で本を出版されている意義について語つてください。

今まで本を出版したい人は東京の出版社を回つて売り込んでいたようですが、それでは著者の「背景」が分からず、納得できる打ち合わせ

も十分にできない気がします。一度心が通じ合えばどこにいても出版への道筋はスムーズです。

今は文章やイラストなど大容量送信できるインターネットの時代、NSの時代、通信販売の時代。福岡にても東京の出版社と変わりない仕事や情報発信ができます。出版は地方の時代なのかもしれません。

### 日本と日本人の魅力発信を

#### 一「次代の女性リーダーを育成」を基本理念に掲げる本学は今年創立100周年を迎えました。最後に後輩である福岡女子大学の学生たちへのメッセージをお願いします。

リーダーといふものは自分でなろうとしてなれるものではなく、みんなと一緒にわいわい言いながら取り組んでいるうちに、おのずとリーダー的素質が現れ、身に付くものです。仕事などで女性リーダーになろうとするなら、周囲の皆への心配りを忘れないでください。なでしこ寮での生活は国際化する社会へ巣立つための恵まれた教育環境だと思います。次のステップを希望されるなら、旅行ではなく海外で生活してみることをお勧めします。言葉がうまくしゃべ

れなくても筆談や辞書を持つて行けば何とか暮らせます。

実際に海外で生活することになつたら、日本人としてのアイデンティティや誇りを持つことと同時に得意なものを一つ持つておくことを心がけてください。日本の文化であるわび、さび、能、歌舞伎、狂言などはカナダ人の関心が高かつたのですが、うまく説明するのがとても難しい。このため、私は料理で頑張りました。巻き寿司やおにぎり、唐揚げ、天ぷら、酢の物などをカナダ人にふるまつて日本と日本人としての魅力の一部を発信できたと思います。カナダで身につけた片言の英語は出版の仕事でアジアや欧州に行つた時にとても役に立っています。

そして何より、「自立」することが大切です。現代は子どもを大事にしそうな傾向があると感じます。何でも親がかり。カナダでは子どもは親から自立を促されます。一人暮らしをしてこそ初めて「生活」というものが分かるものです。

### 最後に、自分のやりたいことや夢を諦めないでください。

年齢を重ねても自分の気持ちを大切に持ち続けてほしい。それが後輩の皆さんへ贈る私のメッセージです。



環境科学科 教授 豊貞 佳奈子  
日本女子大学家政学部住居学科卒業。1994年東陶機器株式会社(現:TOTO株式会社)入社。同社在籍中に、早稲田大学、明治大学の客員研究員や慶應義塾大学SFC研究所上席所員などを兼任し、1999年に一級建築士、2007年に関東学院大学大学院にて博士(工学)取得。同社ESG推進部環境研究グループリーダー、研究担当部長を経て2015年に本学着任。2019年から学長補佐、2022年から女性リーダーシップセンター長。専門分野は建築環境・設備。現在、北九州市環境影響評価審査会委員、福岡市環境影響評価審査会委員、福津市環境審議会副会長、古賀市総合政策検証会議副委員長等を務める。

## 衛生器具設備のこれまでとこれから

100年に想うこと

本学創立100周年に際し、自身の専門分野である「給排水衛生設備」について考える機会をいただきました。給排水衛生設備は、給水設備、衛生器具設備、排水通気設備から構成されますが、ここでは、「衛生器具設備(トイレなど)」について、私の歩みとともににお話しします。しばしお付き合いください。

### 建築→給排水衛生設備を専攻した経緯

大阪生まれの私が中学3年生になった頃、父が大阪の企業から九州大学の助教授(当時)のポストを得たことで、初めての九州、福岡で暮らすことになりました。大阪では、私が幼い頃に両親が新築した木造軸組工法(在来工法)の住宅で暮らしていました。設備は新しく、祖母が茶道教室を開くために立派な茶室もあり、子供なりに気に入っていました。福岡では、まず公務員宿舍に入ったのですが、築古でお風呂はバランス釜と、大変ショックを受けたのを覚えています。両親が早速、戸建住宅の新築を計画したので、住宅メーカーの担当者が宿舎に良く来て、図面を広げながら、間取りや壁紙、照明など、私の希望を聞きながら選んでくれました。受験生でしたが、この時間がとても楽しく、将来「住宅に関わる仕事がしたい」と思うようになりました。



2012年CIB国際学会・ポルトガルにて  
前列の水色バッグ:筆者、その右隣:飯尾昭彦先生、その右隣:坂上恭助先生  
2列目(飯尾先生と坂上先生の間):紀谷文樹先生、その右隣:大塚雅之先生

### 平成の大渴水から節水の大切さを学ぶ

私が就職した1994(平成6)年は後に「平成の大渴水」と呼ばれ、ダムの貯水率が急激に減少したことで長期間の給水制限(夜間)に入っていました。福岡では、バランス釜と、大変ショックを受けたのを覚えています。両親が早速、戸建住宅の新築を計画したので、住宅メーカーの担当者が宿舎に良く来て、図面を広げながら、間取りや壁紙、照明など、私の希望を聞きながら選んでくれました。受験生でしたが、この時間がとても楽しく、将来「住宅に関わる仕事がしたい」と思うようになりました。

水分野に進むことになりました。

飯尾先生は東京工業大学(東工大)建築学科の紀谷文樹先生(写真)と交流されており、そのご縁で4年次に紀谷研究室の研究員になりました。卒業研究はほとんど東工大に通い、日本女子大には月1回報告に行くといった状況でした。就職は、衛生器具メーカーの大手の東陶機器株(現・TOTO株)を希望し、1994(平成6)年Uターン就職という形で福岡に戻りました。

断水)が続きました。新人としてTOTO福岡ショールームに配属された私は、連日、断水中の便器の水の流し方など、お客様からの相談に対応しました。当時の大便器は1回あたり洗浄水量13リットル(以下、L)が標準でしたが、福岡市では「8L以下、かつ手洗い付きタンク」を福岡市型便器として認定していたため、他の地域よりも便器洗浄に必要な水量が少なく、断水時の対応もしやすかったです。この「手洗い付きタンク」は、手を洗った後の水がタンクに溜まり、次の便器洗浄に使われる所以節水になるというものです。現在私が行っている高齢者対象の水まわり調査では、「手洗い付きタンクは『手を洗う時に腰を曲げる必要があり不便』という声が多くお薦めできませんが、節水としては有効な手段です。

当時は福津市の実家に住んでおり、給水制限は福岡市ほど厳しくなかったものの、昼間にバケツ等に水を貯めておく必要がありました。この実家は、私が中学3年生の時に計画した前出の住宅ですが、寝室近くのトイレには、静音型・ホテル仕様の便器を採用し、洗浄水量は16Lでした。断水時には使いにくく、1階の便器(13L)を使ったことを覚えています。現在は、16Lを最新型の38L便器に入れ替えたため、洗浄水量は4分の1以下と、大幅な節水と水道料金削減を達成しました。ちなみに撤去したホテル仕様の16L便器は、ワインレッド色で内側が白色のツートンカラーですが、希少な物であることが分かり、TOTOミュージアムに寄贈しました。

現在私は講演会等で「節水は水資源保全だけでなく、エネルギー削減、CO<sub>2</sub>削減にも繋がる」と主張していますが、それ以上に、渴水時の経験から災害大国日本では、日頃から「各器具での必要水量をできるだけ減らす」ことが重要だと考えています。また、必要水量を減らすとともに、便器の洗浄水に雨水や再生水を用いる検討も必要です。住宅以外の建物では既に導入されていますが、住宅トイレでの雨水・再生水利用が進めば有効な節水手段となります。



米国給排水衛生設備技術者協会(ASPE)の皆様、左端:筆者、その右隣:村川三郎先生、右端:鄭先生、その左隣:坂上恭助先生



英国Waterwiseの皆様、右手前:鄭先生、右奥:筆者

型衛生器具(便器・浴室用シャワーヘッド)設置によるCO<sub>2</sub>削減の実現可能性調査(二国間クレジット事業)を行いました。これらの活動を受けて、2011年には、中国、韓国、台湾、香港の研究機関と、各国・地域の水・環境・建築分野の研究者らで構成される「アジア節水会議」(代表幹事・明治大学・坂上恭助先生・写真)の立ち上げに関わりました。私は副事務局長として、台湾幹事の台湾科学技術大学鄭先生(元台湾建築学会会長・写真)や広島大学名誉教授・村川三郎先生(写真)とともに2012~2014年に世界の節水機関である、豪

### 世界の節水を学ぶ

その後、産休・育休で1年休んで復帰した時にはTOTOがディスボーザ事業から撤退していましたので、2009年から環境部門で、節水によるCO<sub>2</sub>削減といった研究をすることになりました。節水型衛生器具の普及が京都議定書の目標達成にどれくらい寄与できるか、ディスボーザで構築した環境影響評価手法を用いて研究しました。また、中国(大連)、ベトナム、インドネシア、マレーシアを対象に、節水

### ディスボーザの環境影響評価で博士号取得

001年にディスボーザの事業部(東京)に異動しました。ディスボーザは、キッチンのシンクに設置し、生ごみを粉砕して水とともに排水する設備で、「給排水衛生設備」に該当します。ディスボーザが日本に入ってきた当時、下水道行政としては「水処理にも汚泥処理にも悪影響を与える」という扱いでいたが、この評価について再検討されることを東工大の研究員だったころに論文で読み、興味をもつていました。TOTOが扱っていたのは、集合住宅用ディスボーザシステムで、粉砕生ごみを下水道に直接放流するのではなくマンションの地下に設置された排水処理槽で一旦処理してから下水道に放流する、というものでした。処理槽のつまりなどを基礎工事の早い段階から検討する必要がありました。私は入社5年目に二級建築士資格を取得したのでこの部署に配属されることになりました。また、ディスボーザの協会の初代理事長が東工大の紀谷先生というご縁もありました。設計・技術営業の傍ら、ディスボーザは果たして環境に良いのか悪いのかということを、日本建築学会に5報の学術論文として提出し、それらをまとめて博士論文にしました。指導いただいたのは関東学院大学の大塚雅之先生でした。(写真=8ページ)

衛生器具設備のこれから

今後の日本における衛生器具を考える際に

す。地域包括ケアシステムの目的である「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援」において、「排せつ自立」は人間の最も大きな尊厳の一つです。介護を受けている高齢者がトイレまで移動するのが難しい場合、「ポータブルトイレ」や「紙オムツ」が使われますが、介護される側は家族への気兼ねや「家族や他人に自分の排せつ物を見られたくない」という気持ちがあり、介護する側も汚物処理や臭気の問題で負担になっています。これらの問題を解決するため、居室のベッドサイドに設置され、トイレへの移動が困難な人の排せつ行為の支援を目的とした、腰掛式圧送便器が商品化されています（写真）。ベッドのそばに後付けで簡単に設置できる温水洗浄便座付きの水洗式トイレで、床には固定せず自由に移動できます。前出の生ごみを粉碎するデイスプレー技術を応用し、便器から流れてきた汚物・トイレットペーパーを粉碎して、圧送排水します。圧送するため、排水管をフレキシブルにして便器を移動させることができます。まだまだ普及には至っていませんが、これからは自宅で最期まで排せつの自立ができるよう、普及を望みます。また、IoT通信デバイスを搭載したトイレにより、未病状態の把握や介護を要する高齢

者の状態把握に役立つ情報を収集し、利用者へレポートすることで、健康維持などに役立つシステムが検討されており、超高齢社会を支える技術として、実用化を期待します。

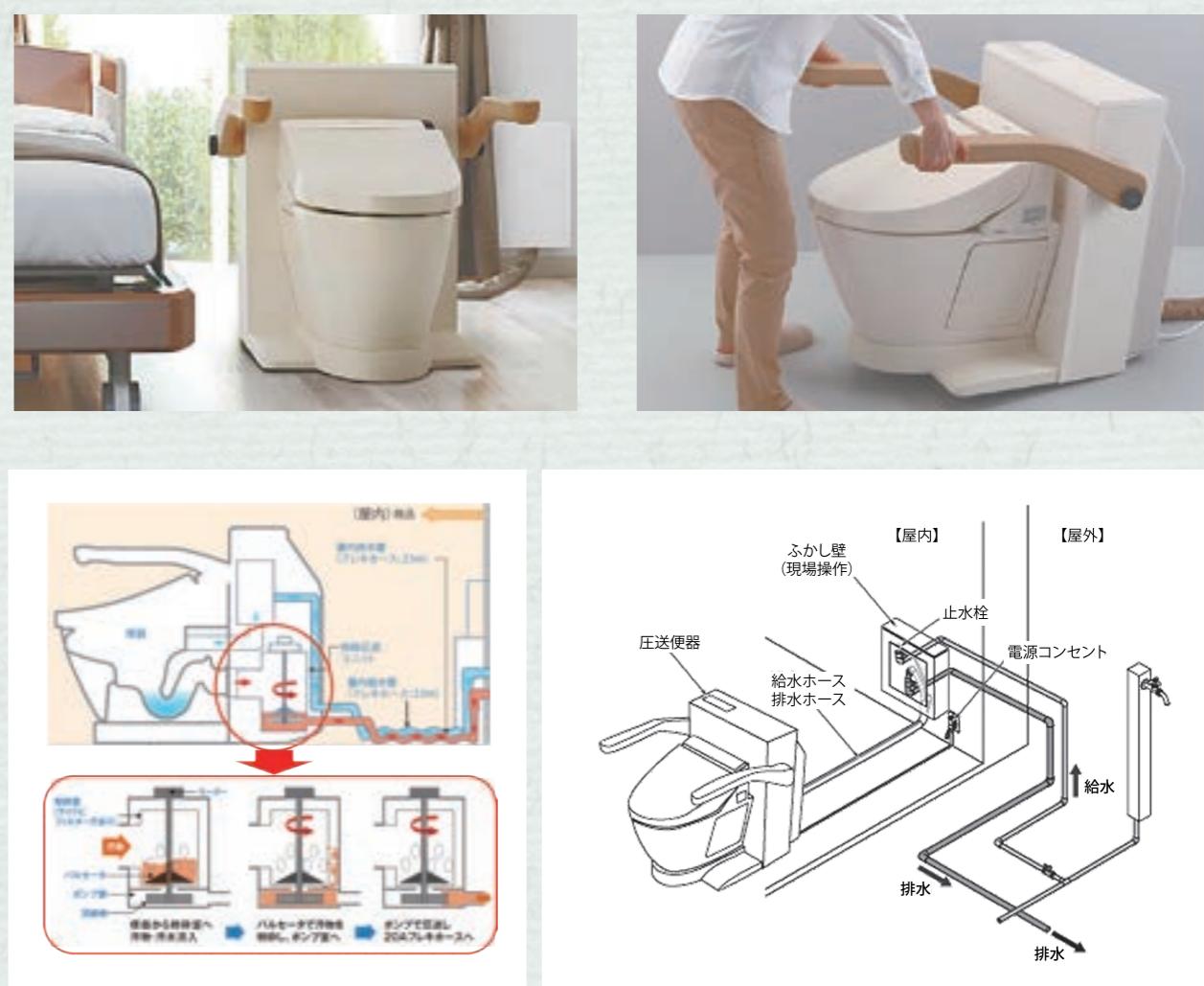
## トイレ巡りのすすめ

受け入れる社会の実現を目的に、東京都渋谷区の公園等17か所の公共トイレを、世界で活躍する16人の建築家やデザイナーによって生まれ変わらせるプロジェクト「THE TOKYO TOILET」を行中です。トイレは日本が世界に誇る「おもてなし」文化の象徴である一方、多くの公共トイレが「暗い」「汚い」「臭い」「怖い」というイメージであることから、発信力のある渋谷区から、清潔で美しい公園トイレを世界に発信する、というコンセプトです。「THE TOKYO TOILET」と書かれたユニホームを着用した清掃員が、1日に3回トイレを清掃します。

私は街歩きが趣味なのですが、2020年11月に渋谷駅から出発して、恵比寿駅、代々木八幡駅、最後は京王線の幡ヶ谷駅まで約15km歩き、竣工済みの7か所のトイレを巡りました。また、2022年6月には、前回竣工していなかつた4か所のトイレを巡るため、幡ヶ谷駅から出発して最後は恵比寿駅まで約12km歩きました。7ページの6

が、渋谷駅と恵比寿駅の間、JR線路沿いの三角形の細い小さなスペースに建てられた東三丁目公衆トイレ（田村奈穂氏設計・写真＝7ページ、上2枚）です。LGBTQ+の人々に配慮し個人の空間をイメ

なお、ヴィム・ヴェンダース監督がこの「THE TOKYO TOILET」を題材とした映画を撮影中で、主演の役所広司さんが前出の清掃員を演じるとのこと。2023年公開予定とのことで、17か所トイレの完成とともに楽しみです。



圧送便器の仕組み

## 圧送便器の屋外配管工事例



100年に想うこと

## 映画という欲望の 100年間

の最初のものといわれる『ジャズ・シンガー』が公開されるのは、1923年に誕生した福岡県立女子専門学校が福岡県女子専門学校と改称した後の1927年のことである(それにしても『ジャズ・シンガー』の「Wait a minute, wait a minute. You ain't heard nothin' yet!」おい、待てよ。お楽しみはこれからだぜ!」は名言だ)。音声で情報を伝えられないという制約は映像表現をより豊かなものにしたといわれている。セリフで伝えられない感情を伝えるために、役者たちはより豊かな表情と大きなアクションを磨き(デビッド・W・グリフォイス監督の『国民の創生』の中で、妹を失った兄ベンを演じたヘンリー・ウォルソールの表情の演技は忘れられない)、劇場では生演奏による劇伴が取り入れられ、東アジアでは活動弁士という西洋にはない文化を生み出すこととなつたのだ。同様に、フルカラーの映画も100年前には見ることはできなかつた。三原色のカラーフィルムを使った劇映画は1935年、ルーベン・マムーリアンの『虚栄の市』まで待たなければならぬのだ(もつともフィルムの1枚1枚に着色するという気の遠くなりそうな作業によるカラー映画は既に存在していたが)。

今から100年前の1923年、映画はどのような状況にあつたのだろうか。国内だけのデータで申し訳ないのだが、1923年に日本国内で製作されたのは396本<sup>1</sup>。2022年の日本映画の公開本数は490本<sup>2</sup>であるから、たしかに今より製作本数は少ないとはいえる、そこまで大きな差はないと考えることもできるだろう。では、1923年にはどんな映画が作られていたか。この年にはセシル・B・デミルの『十説』(チャールトン・ヘストンがモーゼを演じた1956年の同名映画はこれをリメイクしたものである)、喜劇王チャーリー・チャップリンによる『巴里の女性』、西部劇をアメリカ映画における一大ジャンルとするきっかけを作ったと言われる『幌馬車』、そして日本ではのちに「日本映画の父」と称される牧野省三が設立したマキノ映画製作所による『弥次と北八』が公開された。すなわち、産業としての規模こそ現在ほど大きくななくとも、映画は今と変わらぬ人気を博していたということができるだろう。しかしながら、100年前の映画体験は現在のそれとは全く異なつていた。

初期の映画が同時録音された音声トラックを伴わない「無声映画」であったことはよく知られている。音声を伴つた「トーキー映画」



写真1  
リュミエール兄弟

筑紫女学園大学 教授 一木 順  
(元福岡女子大学 WJC非常勤講師)

西南学院大学大学院文学研究科アメリカ文学専攻博士後期課程単位取得退学。ニューヨーク州立大学オルバニー校大学院黒人研究科修士課程修了。アメリカ黒人研究およびマンガ、映画を中心とするポピュラー文化研究に従事。最も好きな映画は『仁義なき戦い』。



写真3  
アメリカ大陸横断鉄道の開通を  
知らせる宣伝チラシ

的なアイデアにつながる何かがあり、それに導かれて創意工夫を重ねた無数の人々がそこにいたのである。では映画的なものを生み出した時代の要因とは何だったのか。ここからは19世紀後半の世界について考えてみたい。

19世紀中でもその後半部が発見と発明の時代であつたことは疑いの余地がない。まずは主な発明・発見を列挙してみよう（カッコ内は発明・発見の年）。ジャイロスコープ（1852）、ダイナマイト（1867）、信号機（1868）、白熱電球（1879）、フォトフォン（1880）、自動車（1885）、ガソリンエンジン（1886）、レーダー（1887）、無線電信（1895）、X線（1895）、ウラン放射能（1896）、ラジウム（1898）、飛行機（1903）、そして特殊相対性理論（1905）。もちろん映画という文化の基礎となつた技術もここに含まれるのだが、この時代の発見・発明の多くは19世紀から20世紀初頭の世界を劇的に変化させ、21世紀に生きる私たちの生活につながる文明の流れを作つたといえるだろう。

しかしながら、この時代のイノベーションの中でも特に注目しておきたいのは、移動に関わるもの、言い換えれば大量輸送機関の普及と

かの芸術の発生はすべて先史時代の霧の中に埋もれている」と述べているように、このリュミエール兄弟起源説は映画研究者にも、また一般的にも広く長く受け入れられてきた。そして19世紀の終わりに登場したこの新しい文化の持つインパクトは絶大であった。ロシアの作家マキシム・ゴーリキーを含む複数の映画批評家が、リュミエール兄弟の最初の映像の一つである「ラ・シオタ駅への列車の到着」を見た観客たちが、自分たちのほうへ向かつて走つてくる巨大な列車の動きに圧倒され、悲鳴を上げて部屋から逃げ出したという逸話に言及している（その様子は2011年公開の『ヒューゴの不思議な発明』の中で生き生きと再現されている。ぜひ参照されたい）。この逸話については映画創成期にまつわる都市伝説にすぎないとする映画史研究者もいるが<sup>4</sup>、少なくとも映画という新しい技術に立脚した文化が、その時代を生きた人々のイメージネーションをはるかに超える世界を現出させたことは疑いの余地がない。

しかしながら、映画史研究が進むにつれて、このリュミエール兄弟を映画の絶対的な生みの親とする定説への異議申し立ても行われるようになつた。1893年にアメリカの発明王トマス・エディソンが公開したキネトスコープとよばれる映像販売機をもつて映画の始まりとするものもあつた。あるいは1888年にフランスの発明家ルイ・ブランシエが製作・公開した、わずか2秒間の作品である「ラウンドヘイの庭の場面」こそ最古の映画であるとするものもあつた<sup>5</sup>。このように映画の起源はこれまで信じられてきたよう単一ではないのだが、ここで本当に驚くべきなのは、映画という大きなインパクトを持つた技術、同時代人の想像をはるかに超える世界を見せてくれる技術が、様々な場所で、同時多発的に生まれてきたという事実そのものであろう。それが示しているのは、映画という技術は一人（あるいは二人）の超越的なひらめきの持ち主が何かの拍子に生み出したものではないということである。つまり、その時代には映画という独創



写真2  
「ラ・シオタ駅への列車の到着」

発達につながった発明である。例えば、蒸気機関。18世紀半ばにジェームズ・ワットによって実用化のめどがつけられた蒸気機関は、19世紀になると様々な交通機関への転用が図られた。19世紀の半ばをすぎると、外洋航行用の大型蒸気船が普及することとなる（日本の近代化を促進したペリーの艦隊にも蒸気船が含まれていたことが知られている）。陸上移動にも蒸気機関は積極的に使われることとなり、1876年には蒸気機関車がけん引する超特急列車が、かつては数か月を要していたアメリカ大陸横断を83時間39分で成し遂げた。しかしながら、19世紀後半には蒸気機関はより軽量で高出力のガソリン機関にとってかわられることとなる。1885年にドイツのカール・ベンツが最初のガソリン自動車を製造して以降、ガソリン自動車は急速に普及し、1895年にはベンツ製のエンジンを用いた世界初のエンジンバスがドイツで供用されている。

このように、この時代には人々の移動に関わる様々なイノベーションが生まれているのだが、そのことは、人々の行動範囲を急速に、それも長距離の移動を伴う旅行は長く一般大衆の手に届かないところにあった。「巡礼」や「グランドツアー」という言葉が示しているように、西洋において旅行とは、目的において、あるいは社会階層において、非常に限定されたものであった。日本においては、江戸時代から旅行が比較的広く定着していたといわれているが、「一生に一度はお伊勢さん」という言葉が示すように、長距離の移動を伴う旅行は人生に一度か一度実現できるような稀有な機会であったことも事実なのである。

そこへ、様々な交通機関が発明され、移動が一気に可能になったのが19世紀末だった。研究者の中にはこの時期を「移動の時代」<sup>6</sup>と呼ぶ者さえいるのだが、この時期に旅行は一気に大衆化し、人々は生まれ

故郷を離れ、全く知らない土地へと容易に向かうことができるようになった。船や鉄道といった新しい移動手段によって自分の見慣れた風景を離れた当時の人々は、新鮮な驚きをもつて、見知らぬ土地の新しい風景を眺めたことだろう。そしてその新しい体験は、彼らにそれまでにはなかつた新しい感情をもたらしたことだろう（そういえば、室尾犀星が「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と詠んだのもこのころだ<sup>7</sup>）。

ここでちよつと考えてみたい。私たちが新しい場所へ行ったとき、新しい体験を持つたとき、私たちはどんな行動に出るだろうか。これまでもに見たことがないものを見たとき、私たちは写真や動画を撮り、眼前に広がる光景を記録しようとするだろう。全く新しい体験をしたとき、私たちはその体験をできるだけ詳細に記憶しようとするだろう。中にはその体験に関わる何かを持ち帰ろうとさえするだろう（旅先で手に入れたほんの小さなものを捨てがたく感じた経験は誰にでもあるだろう）。そして、日常の中に戻ってきたとき、私たちは、写真を使いながら、また自分の言葉で体験を語りながら、あるいは旅行先を思い起こさせるお土産を渡しながら、その体験をほかの人たちと共に共有しようとするだろう。こうした私たちの行動が示しているのは、私たちは新しいものに出会つたとき、それを正確に記憶し、ありのままに再現したいという願望を持っているということだ。

そのように考えると、新しい発明の数々が19世紀末の人々にもたらしたもののが見えてくる。それは移動が可能にした新しい体験を記録し、再現したいという願望である。そして、わたしはその願望を映画に關わる原初的な欲望と呼びたいと思う。自らの新しい体験を、自分が見たままに記録し、再現する。その欲望を実現しようとすると、努力が映画という技術を生み出したように思えるのである。新しい風景をできるだけ複数記録しておきたいという欲望が、薄くて軽い

刻々と変化する様々な時代の欲望を取り込みながら、発展してきたのである。映画が急速に普及し、より新規なるもの、より刺激的なものを求める声が高まる中で、見たものを再現するための道具として生まれた映画が「現実には体験できないことを疑似体験するためのメディア」へと進化するのにそれほど時間はかからなかつた（ジョルジユ・メリエスの『月世界旅行』はリュミエール兄弟の最初の映像から7年後のことである）。様々なイデオロギーがぶつかり合う世界で、映画は大衆扇動の絶好の道具として利用されることとなつた（1930年代に3回アカデミー監督賞を受賞したハリウッドの巨匠フランク・キャプラがプロパガンダ映画の傑作と称される『なぜ我々は戦うのか』を撮つたのは偶然ではない）。そして、世界に情報があふれ、再現すべき新規なるものが失われていったとき、映画は非現実的な世界を圧倒的なリアリティで体験させる技術を生み出した（キヤメロンが作り出したパンドラは実在のどの世界よりもリアルだ）。

繰り返しになるが、映画という文化は時代の欲望と手を携えて発展してきた。そして、ここにこそポピュラー文化としての映画の真骨頂があるともいえるだろう。変遷する時代の中で、その変化を敏感に読み取りながら、またある時にはその変化を先導しながら、映画というポピュラー文化は生き続けてきたのだし、それゆえにポピュラー文化というレンズは、ほかでは見ることのできない時代の諸相を映し出してくれる。そこには、私たちを熱狂させるようなものもあれば、あまりの醜悪さに目をそむけたくなるようなものもあるだろう。しかし、それらを通して社会を観察することこそ、ポピュラー文化の研究者としての私たちの仕事だと思うのだ。

これから的新しい100年間、映画はどのような進化を遂げるのだろうか。2123年、私たちはどのような社会に住み、どのような映画を見ているのだろうか。そこで展開されている映像スペクタクルを想像しつ、この稿を閉じたい。

ここでもちよつと考えてみたい。私たちが新しい場所へ行ったとき、新しい体験を持つたとき、私たちはどんな行動に出るだろうか。これまでに見たことがないものを見たとき、私たちは写真や動画を撮り、眼前に広がる光景を記録しようとするだろう。全く新しい体験をしたとき、私たちはその体験をできるだけ詳細に記憶しようとするだろう。中にはその体験に関わる何かを持ち帰ろうとさえするだろう（旅先で手に入れたほんの小さなものを捨てがたく感じた経験は誰にでもあるだろう）。そして、日常の中に戻ってきたとき、私たちは、写真を使いながら、また自分の言葉で体験を語りながら、あるいは旅行先を思い起させるお土産を渡しながら、その体験をほかの人たちと共に共有しようとするだろう。こうした私たちの行動が示しているのは、私たちは新しいものに出会つたとき、それを正確に記憶し、ありのままに再現したいという願望を持っているということだ。

そのように考えると、新しい発明の数々が19世紀末の人々にもたらしたもののが見えてくる。それは移動が可能にした新しい体験を記録し、再現したいという願望である。そして、わたしはその願望を映画に關わる原初的な欲望と呼びたいと思う。自らの新しい体験を、自分が見たままに記録し、再現する。その欲望を実現しようとすると、努力が映画という技術を生み出したように思えるのである。新しい風景をできるだけ複数記録しておきたいという欲望が、薄くて軽い

セルロイドを使用し、連続的な撮影を可能にした映画用フィルムを作り出したのではないか。目の前に広がる新しい現象を動的なものとして記録したいという欲望が、フィルムがレンズの前で止まり、露光によって記録したいという欲望が、映像を記録し、次のコマへ移動するという連続的な間欠的動作を繰り返す映画用カメラを作り出したのではなかつたか。そして自らの体験を見たままに再現して共有したいという欲望が、映像を記録したフィルムに光を当てながら1秒間に16コマという高速で送ることで、あたかも動いているかのような映像を現出させる映写機の発明にながつたのではないか。

このように考えると、映画という文化は時代が生み出した人々の願望の産物であることがわかるだろう。そして原初における映画と時代の照応関係はその後も続いていくことになる。すなわち、映画は

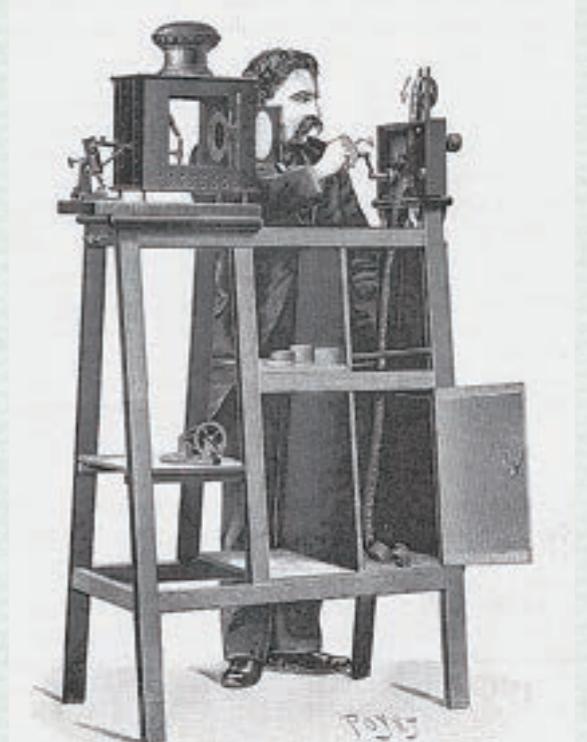


写真4 シネマトグラフ

- 1.日本映画データベースウェブサイトより(<http://www.jmdb.ne.jp/1923/a1923.htm>)。2023年1月28日確認。
- 2.一般社団法人日本映画製作連盟ウェブサイトより(<http://www.eiren.org/toukei/index.html>)。2023年1月28日確認。
- 3.ペラ・バラージュ、『映画の理論』、佐々木基一訳、学芸書林、1970。
- 4.Martin Loiperdinger, The Moving Image: Volume 4, Number 1, Spring 2004, pp. 89-118.
- 5.ギネス・ワールド・レコーズはこの「ラウンドヘイの庭の場面」を世界最古の映像作品として認定している。
- 6.Cook, R. A., Yale, L. J. and J. J. Marqua, Tourism: the Business of Travel, New Jersey: Prentice Hall, 2006.
- 7.これは室尾犀星の6篇からなる「小景異情」の一節である。「小景異情」は1913年が初出であり、1918年に詩集『抒情小曲集』に収められた。

# 創立 100周年の 歩み

沿革

1923 福岡県立女子専門学校開校

1950 福岡女子大学開学

1993 福岡女子大学大学院設置

2006 公立大学法人福岡女子大学設置

2023 創立100周年

## 福岡女専が創られた時代

本学の前身である福岡県立女子専門学校が創立されたのは、大正12年（1923）のことだ。大正という時代は、明治期に推し進められた日本の近代化がさらなる発展を見せ、福岡にも種々の産業が誕生し、インフラ整備が進んだ時期である。

大正元年に日活（日本活動写真株式会社）が設立され、福岡には翌2年に、市内初の常設活動写真館として「世界館」が開業した。チヤップリンや尾上松之助ら映画スターが人気を博し、映画産業が根付き始めた。デパート（百貨店）の普及もこの頃である。明治37年（1904）に、三越呉服店が百貨店への業態変化を宣言した。これを受け、大正期にかけて松坂屋、大丸、高島屋など多くの呉服店が百貨店を開業した。福岡に百貨店が誕生したのは大正14年と少し遅れ、東中洲に玉屋呉服店が開業している。百貨店が普及する過程で「座売り」から「陳列」方式へ移行し、それに伴って土足入場方式へと遷り、現在では一般的となつた販売方式も普及した。

福岡の大正期のインフラ整備としては、上水道の創設が挙げられる。日本で初めて近代水道が布設されたのは明治20年の横浜市の水道であり、その後函館市、長崎市など全国各地で水道事業が進められた。福岡市も同じ頃に水道事業が計画されたが、財政上の理由で頓挫してしまう。ようやく大正2年に水道布設の認可が下りると、同5年に曲淵ダムと平尾浄水場建設に着工した。同12年の完成を以て、当時の福岡市全域と一部市外に通水が始まった。

交通機関の充実も大正期である。日本の鉄道の開業は明治5年であり、福岡でも同22年に博多駅が開業した。以降、私鉄により多くの路線が敷設されたが、同43年になると福岡に路面電車が登場した。

間もなくして大正2年にはタクシーも開業し、福岡でも自動車が交通機関として利用されるようになった。その後昭和にかけて全国的に自動車が普及した。

大正3～7年の第一次世界大戦は日本経渓に急激な成長をもたらしたが、このような社会の発展に伴い、教育制度の拡充も行われた。明治後期に増加していた中等教育機関と、高等教育機関への進学志願者はさらに増加の一途を辿り、大正期には女子の高等教育への関心が高まつた。大正2年には東北帝国大学に3名の女子が合格し、初の女子帝大生が誕生した。しかし、女子にとって大学への間口は非常に狭く、女子高等教育機関の設立が全国で求められた。

そのような中、大正8年に福岡でも女子大学の実現に向けて、女子高等教育機関を設置する議論が起つた。その動きに賛同した福岡の知名婦人達が、博覧会に「お雛茶屋」を出店して設立資金集めを行つた。また、県議を歴訪するなどして資金面、政治面ともに積極的な活動を展開した。翌9年に女子専門学校設置の建議案が県議会に上程されたが、財政上の理由等により敢え無く否決された。しかし、当時の県知事や福岡市長、その夫人達が中心となり粘り強く活動を続け、翌10年の県議会で可決された。こうして女専が設置されるも、戦前に女子大学が設置されることには叶わなかつた。今ある福岡女子大学は100年前の人々の悲願に他ならない。私たちはその歴史を踏まえ、これから高等教育について考えていかなければならぬ。



大正9年(1920)に  
お雛茶屋で販売された  
女子大学生人形と柳原白蓮の書  
(『福岡女子大学五十年史』より)



昭和8年(1933)頃  
須崎キャンパス正門  
(「専8卒業アルバム」より)



昭和8年(1933)頃  
西中洲の大同生命ビル前  
路面電車の停車場があった  
(「専8卒業アルバム」より)



昭和5年(1930)頃  
中島町の金堂  
(「専5家卒業アルバム」より)



昭和8年(1933)頃  
中洲附近、  
東中洲の世界館  
(「専8家卒業アルバム」より)

## 創立100周年 プレイイベント

2022.12.1㊐

### 100周年記念レビュー

本学の大学会館にて歌劇ザ・レビューHTBによる特別公演を実施しました。マンドリンクラブとのコラボレーションや、数々の貴重な舞を披露してくださいました。鑑賞に来られた多くの方から感動したとのお声をいただき、大盛況のうちに幕を閉じました。



2022.11.12±

### 福岡女子大学フィルハーモニー オーケストラ演奏会

この日のために日々遅くまで練習に励み、多くの方々の協力のもとこの日を迎えることができました。鑑賞に来られた多くの方から感動したとのお声をいただき、大盛況のうちに幕を閉じました。



2022.11.11金

### 関 美和氏による講演会& TALK SESSION

翻訳家のほかベンチャーキャピタルファンドMPower Partnersの創設者としても注目が集まっている関 美和氏による講演会を実施しました。パワフルな行動力や女性として輝いている姿にパワーをいただきました。



2022.11.2水

### ランゲージ・カフェ自主企画 "祝・FWU100周年パーティー"

ランゲージ・カフェの学生たちが本学の100周年を祝うイベントを企画しました。ランチタイムと夕刻の2回を開催し、コロナ禍以前に開催していたような、学生や教職員の皆さんとの交流の場となりました。締めにはサポーターが準備していた歌(レミゼラブルの"Do You Hear the People Sing?" FWUバージョン)も披露されて和やかな時間となりました。



2022.10.30日

### つくしみ交流会

2021年12月に閉園となった「かしいかえん」の映像を皆で鑑賞し思い出を語り合った後、社会人として活躍している同窓生との交流会が行われました。参加した学生は卒業後の様々な進路について学べる良い機会となりました。



2022.9.28水

### 夏の音楽祭

ここ数年活動が制限され、披露する機会がなかった学生たちが主体となり音楽祭を開催しました。音楽サークルや有志の団体合わせて5団体が出演し、夏をイメージした音楽を披露しました。



# FWU TOPICS

2022.12.1木▶12.28水

## 図書館部門の学生委員によるイベント企画

図書館1階にて、図書館部門の学生委員4名による2つの企画「読書マラソン」(※1)と「世界『文学』地図」(※2)を開催しました。どちらの企画でも、多くの方々から図書の推薦文が寄せられ、充実した展示コーナーが出来あがりました。

推薦文の募集は終了しましたが、図書の展示はしばらく続ける予定です。図書館にお越しの際は、学生委員の皆さんの素敵なアイデアが散りばめられた展示コーナーをぜひ一度ご覧ください。

(※1)期間内に図書館の本を読んで短い感想文を提出すると、冊数に応じて景品がもらえる、読書推進のための企画。

(※2)本学教職員や学生の皆さんにお薦めの海外文学作品を紹介していただき、展示コーナーにて推薦された図書やその国の文化等の紹介を行う企画。



2022.12.2金

## ノーベル賞受賞者大隅良典先生講演会

この講演会は本学と九州大学との共同主催で若者の将来への情熱と人間力に結び付けてもらうことを目的にノーベル賞受賞者をお招きし、探求心や向上心について語っていただいている。6回目となる今回は、2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅良典先生にご講演いただき、会場の高校生・大学生等は熱心に耳を傾け、メモを取る様子が見られました。講演後には多数の質問が出るなど、盛況のうちに終了しました。



2022.12.14水

## 体験学習報告会&受入先担当者を迎えたパネルディスカッション

今年度開講された6プログラムの履修生による報告、統いてプログラム受入先担当者によるパネルディスカッションを、対面・オンライン併用で行いました。2022年度からスタートした新カリキュラムで「リーダーシップ開発系」に位置付けられた体験学習科目。学生からは、活動を通じて見つめ直した自身や他者、社会についての語り、受入先の皆様からは、活動成果とともに率直な課題感が共有されました。「専門性」の扱いについても活発な議論が交わされました。



2022.12.27火

## 3大学合同ゼミに参加

国際教養学科の木村ゼミは、福岡大学(東アジア地域言語学科の緒方ゼミ)、九州国際大学(国際社会学科の山田ゼミ)と韓国研究関連ゼミによる合同ゼミに参加してきました。木村ゼミは「0.8%世界最低の韓国出生率～女性雇用対策が解決策になるか～」というタイトルで発表し、普段のゼミ活動の成果を伝えることができました。他大学の学生とも活発な議論をすることで、今後の研究への一層の励みとなつたようです。韓国に一番近い都市福岡で学ぶもの同士、大学の枠を超えて、今後も学びを深めていく予定です。



2022.11.17木

## 女性のためのウェルカムバック支援プログラム ドラフト会議

「女性のためのウェルカムバック支援プログラム」第4期の受講生たちが、講座を通して見つけた自分らしさや働く上で強み、そして就労への意欲や希望をスピーチし、企業の方々に直接届ける「ドラフト会議」を開催しました。



ステージに立ち、伝えたい想いを言葉にして堂々と発表する受講生たちに、インターンシップ候補企業、審査員の皆さんから「いいね!」のプラカードで応援の気持ちが伝えられました。スピーチ後は、参加企業の方々と直接面談する交流会を実施。様々な職種・業種の企業の方々と面談する中で、受講生が「自分の可能性」を再認識する機会となったようです。



2022.11.27日

## YOUTH FESTA HIGASHI 2022に食育ワークショップを出展

子どもを対象とした様々な体験の場を提供するイベント「YOUTH FESTA HIGASHI 2022」がなみきスクエア(福岡市東区)で開催され、本学の食育ボランティアサークル「しづくねっと」が「食育かるたと野菜カード作り」というテーマでワークショップを出展しました。小学生を中心に延べ35名が参加し、本学オリジナルの食育かるたや野菜スタンプを使った野菜カード作りを通して、楽しみながら食や健康について学びました。



2022.11.2水・15火・29火

## 内定者座談会

就職活動が本格化してくる11月、主に学部3年生・大学院1年生を対象とした内定者座談会を3回開催しました。計15名もの先輩方にご参加いただき、それぞれのブースに分かれてお話ししていただきました。参加者からは、「実際に就職活動を経験し、憧れの企業の内定を獲得した先輩から生の情報を聞いてモチベーションが上がりました」と大好評でした。また、内定者も「沢山質問してもう一つ、一生懸命メモを取る後輩の姿に勇気づけられました」と双方にとって貴重な時間になったようです。



2022.12.1木

## イルミネーション点灯式

地域の方々とのより一層の交流を図り、キャンパスのオープン化を目指すため、今年度もイルミネーション点灯式を実施しました。寒い中、大勢の方が来場し、点灯のシーンではカウントダウンの合図に合わせて盛大に鳴らされたクラッカーに合わせて、キャンパスが桜色のイルミネーションに彩されました。今年度は100周年記念イベントの1つとして、点灯式後に「歌劇ザ・レビューHTB」による特別公演も開催され、キャンパスが賑わいました。



2022.10.12水

## (東部地域大学連携) 学生が制作した防犯動画に対して 東警察署から感謝状が贈られました

本学・九州産業大学・福岡工業大学の3大学からなる大学連携「東部地域大学連携」では、「女子学生のための防犯推進協議会」を組織し、福岡県警や自治体と連携して、地域の防犯活動に取り組んでいます。この度、九州産業大学で行われた「地域安全フォーラム」において、学生発の取り組みとして制作を行った性犯罪防止のための動画に対して、東警察署から感謝状が贈呈されました。学生が制作した防犯動画「その油断、危険です！」は、福岡県警の公式YouTubeチャンネルにて公開されています。



2022.11.3木▶11.5土

## 女性トップリーダー育成研修

本学では、「次代の女性リーダーを育成」を大学の基本理念として、より良い社会づくりに貢献できる人材の育成に努めており、学生だけではなく、社会人女性を対象とした研修プログラムも実施しています。今年度で、7回目を迎える「女性トップリーダー育成研修」は、「アート思考で未来を拓く、これからリーダー育成」をテーマとし、これまでの研修成果を活かしつつ、研修内容を「自分起点」を軸に、価値に革新を起こす「アート思考」を柱としたものに刷新しました。24名の受講生は2泊3日の宿泊研修に参加し、企業トップの講話やアート思考に触れ、学びを深めました。1月のフォローアップ研修に向けてさらに自分を深く掘り下げていきます。



2022.11.7月

## 第7回ろうそく能

本学では2011年の国際文理学部創設以来、感性の教育に力を入れており、日本の伝統文化に触れる機会として今年で7回目となるろうそく能の公演を実施しました。寮活動の一環として出席した学部1年生、近隣の教育機関や自治協議会の方々など、約200名が来場しました。

例年、司会や受付を寮生が行いますが、今年は配布パンフレット、投影スライド、ロビー展示の飾りやポップの作成も寮生有志が行い、本学ならではの公演となりました。



2022.11.16水

## 第2回 新任・昇任教員による講演会

今年度2回目となる本講演会では、国際教養学科の柴田聰准教授、近藤洋平准教授、櫻木理江淮教授、食・健康学科の梅木陽子准教授計4名による講演を行い、教職員をはじめ、学生・一般の方とあわせて102名にご参加いただきました。対面とオンライン併用で行われた会場には、地域にお住まいの方々に多数来場いただき、質疑応答時にも活発な意見交換が行われました。地域の方々に大学を知り、良い機会となりました。



2022.8.27土

## ウェブオープンキャンパス

全国から約150名の高校生に参加いただきウェブオープンキャンパスを開催しました。

当日は、本学の魅力を学生のプレゼンテーションで紹介したあと、様々なテーマで学生と高校生が話することで大学生活について知つてもうことができました。また、本学ならではの取り組みであるLanguage Caféでは韓国語や英語、ドイツ語による交流を行いました。

その他にも、入試や留学をはじめ様々な個別相談会を実施し、高校生の疑問を解決する良い機会となりました。



2022.9.16金

## 秋卒業式・秋入学式

対面とオンラインを併用した形式にて秋卒業式・秋入学式が執り行われました。

秋卒業式には、学部生3名、大学院生2名が出席し、晴れやかな顔で新たな門出を迎えるました。オンライン出席の卒業生に対しても向井剛学長からスクリーン越しに卒業証書が授与されました。秋入学式では、大学院生4名が出席しました。学長から歓迎の言葉が贈られたあと、入学学生1名ずつが自己紹介と入学にあたっての抱負を語り、心温まる入学式となりました。



2022.9.28水

## 秋学期WJCプログラムがスタート

海外協定校から交換留学生を受け入れるWJCプログラムは、2022年度秋学期に14ヵ国から17名の学生を迎える、9月28日に開講式を挙行しました。9月の湯布院への日帰り研修にはじまり、10月に開催された「かすみ祭」ではWJCの留学生たちがWJCのテーマソング「チェリー」の合唱を披露するなど、本学の行事にも積極的に参加しています。英語での授業、文化体験、自主研修や寮生活といった様々な機会を通して、日本への理解を深め、有意義な留学生活を送ることを期待しています。



# 人事消息 (2022年9月2日～2023年3月31日付まで)

## 教員

種別	所属	役職名	氏名	日付
退職	国際教養学科	教授	武 繼平	2023年3月31日
	環境科学科	助教	藤岡 留美子	

## 職員

種別	所属	氏名	日付
退職	地域連携センター	柴尾 純子	2023年3月10日
	国際化推進センター	宮崎 光子	
	アドミッションセンター	後藤 瑞貴	
	経営管理センター	木下 真理	
	地域連携センター	岩永 聰子	
	100周年記念事業推進室	田山 道子	
		内藤 嵩浩	

## 福岡女子大学2023年度公開講座

【受講料】各回500円(高校生無料)

日程	タイトル	概要	講師
1 6月3日(土) 13:30～15:00	A Comparison of the Education Systems in the UK and Japan	In this lecture, the speaker, who has been involved in education in the UK and Japan for many years, will discuss with you the differences (positive and negative) between these educational systems.	Nigel STOTT (言語教育センター教授)
2 6月21日(水) 10:00～11:30	食の安全を守る研究最前線 -危険な細菌みつけた!-	衛生環境が改善している現在においても、食中毒の発生は後を絶ちません。本講座では、日本で発生している食中毒のなかでも細菌を原因とする食中毒について、家庭ができる予防法から制御法に関する最新研究まで様々な情報を紹介します。	小林 弘司 (食・健康学科准教授)
3 7月12日(水) 13:00～14:30	イノベーションってなんだろう? -アイデア発想～ビジネスモデルまで、一番やさしい新規事業の作り方-	新規事業・社内起業、ビジネスモデルってどんなもの?聞いてみたい、でも専門家はややこしそうで、と悩んでいませんか?一番やさしい講義でセンスだけに頼らず新規事業を生み出していくエッセンスを解説します。	品川 啓介 (女性リーダーシップセンター教授)
4 7月26日(水) 10:00～11:30	人間の嗅覚による「におい」の数値化	悪臭問題を例に挙げ、においを定量的に表す必要性について紹介します。実際ににおいを嗅ぐ体験を通して、においを数値化する難しさや課題について考えます。	藤岡 薫 (環境科学科准教授)
5 9月20日(水) 10:00～11:30	食に関する健康情報とうまく付き合う	食事や栄養に関する情報は昔に溢れていますが、正しいかどうか疑問なものも多く含まれています。この講座では情報を取捨選択する際に考慮すべき視点や、忘れ去られがちな個人差の問題等について考えます。	濱田 俊 (食・健康学科教授)
6 10月18日(水) 11:00～12:30	ジェンダー平等と宗教	現在、国際社会はジェンダー平等の達成に向けた取り組みを進めています。この潮流の中で、日本の、そして世界の宗教集団・団体はどういう活動をしているのでしょうか。その成果と課題を、いくつかの事例から考えます。	近藤 洋平 (国際教養学科准教授)
7 10月31日(火) 14:00～15:30	〈印象〉を描く時代 -日本近代の文学と美術-	視覚芸術の歴史はフランス印象派の登場と共に大きく変わった。そして〈印象〉は芸術一般の表現方法として世界中に波及する。日本の湿潤の空気感のなかで変容していった〈印象〉や〈感覚〉の美を追いかながら、明治大正の文学を見直してみたい。	坂口 周 (国際教養学科准教授)
8 11月25日(土) 13:30～15:00	A Foreigner's Exploration of Kyushu	In this lecture, the speaker, who has lived in Japan for many years and loves Kyushu, will share his favorite places in Kyushu and what he has learned there. We would also like to share information and advice from your knowledge and experience.	Nigel STOTT (言語教育センター教授)
9 1月19日(金) 15:00～16:30	いま、捕鯨を考える	2019年にわが国は国際捕鯨取締条約から脱退し、商業捕鯨を再開した。本講演では、欧米と日本の捕鯨の歩みを振り返り、両者の捕鯨を巡る考え方の相違を示し、その問題点を皆さんとともに考えます。	辻 信一 (環境科学科教授)

\*講座番号1・8は、英検2級以上もしくはそれと同等以上の英語力をお持ちの方を対象とさせていただきます。

【お問い合わせ】福岡女子大学 地域連携センター TEL:092-661-2728

# FWU TOPICS

2022.1 ▶ 12

## 2022年 美術品寄贈の御礼

作者	作品	寄贈者	寄贈時期
小野 珀子	茶器8点	鎌田 迪貞様	2022.3
山田 達男	能面44点	山田 達男様	2022.4
亀井 味楽	茶器3点	亀井 味楽様	2022.7
小川 靖子(卒業生)	日本画1点	西嶋 洋子様	2022.11
野見山 晃治	絵画3点	鎌田 迪貞様	2022.12

福岡女子大学美術館へ上記の美術品を寄贈いただきました。ご寄贈くださいました皆様、誠にありがとうございました。小野珀子氏の作品は図書館1階へ、亀井味楽氏の作品は研究棟1階、野見山晃治氏の作品は図書館棟1階インフォメーションに展示しております。現在展示されていない作品も今後展示していく予定です。



2022.10 ▶ 12

## 「あまおう」の輸出箱をデザインしました

環境科学科2年生の古賀舞香さん、上田佳乃さん、西迫絢さんが九州農産物通商株式会社との共同事業として、農林水産省の青果物輸出産地体制強化加速化事業に参画しました。これまで「あまおう」の海外輸出には、国内出荷用のいちご箱が使われており、この度、「あまおう」の魅力をより一層発信するため、台湾とタイ向けの輸出箱を授業でデザインしました。古賀さんの新鮮ないちごを大きく表現した作品をメインに上田さんと西迫さんの博多織の献上柄をイメージしたデザインを取り入れて完成しました。3名の創意工夫が凝らされたパッケージが、「あまおう」を海外に運びます。



## 成果報告

### 国際ソロプチミスト福岡-第II 女性研究者賞を受賞

環境科学科の豊貞 佳奈子教授(学長補佐・女性リーダーシップセンター長)が国際ソロプチミスト福岡-第II 女性研究者賞を受賞しました。

※国際ソロプチミストは、理解促進、提唱、活動を通じて女性と女性の生活を向上させるためのグローバル・ボイスです。世界約122の国と地域に、75,000人以上の会員を擁する女性の世界的なボランティア組織です。



### 多文化教育国際学術大会にて最優秀賞受賞

韓国の仁川にある仁荷大学で開催された多文化教育国際学術大会で、国際教養学科の金希京准教授が「韓国語教育の現状と課題:在日韓国人向けのテキスト開発の課題に焦点を当てて(原題:Current Status and Issues of Korean Education for Koreans in Japan-Focusing on the task of developing textbooks)」をテーマに発表し、最優秀賞を受賞しました。



### 競技ダンス大会にて8位入賞

第68回全日本学生競技ダンス選手権大会バンドプレの部において、国際教養学科4年の湯野ひよりさんが、8位に入賞しました。湯野さんは本学の舞踏研究部に4年間在籍し、多くの大会に出場・入賞を果たしました。



### 2022年度 人間-生活環境系学会 論文賞受賞

門司真由美さん(大学院博士後期課程在籍時に投稿)と環境科学科庄山茂子教授の共著論文「病院食のトレイの色彩が患者の食事に及ぼす影響」(『人間と生活環境』26巻2号に掲載)が論文賞を受賞しました。この研究では、入院患者を対象に異なる色のトレイで配膳した食事全体のおいしさ感や印象について体調別に調査・分析し、さらに残食量を測定することにより、病院の食事において、食材・料理だけでなく食環境も重要であることを実証しました。病院をフィールドにした研究は非常に困難である中で調査を行い、食環境という生活環境の重要性を実証したことが評価されました。



# 福岡女子大学100周年記念事業

未来を拓くなでしこの花 一人を育て、知を生かす

## 寄附報告

福岡女子大学100周年記念事業基金へのご寄附に、心からの感謝を申し上げます。

件数	寄附額(円)
計 1,611	223,635,926

(2022年12月31日現在)

## 領収書について

2022年8月1日から2022年12月31日までにご寄附いただいた皆様には、2023年1月末頃までに「福岡女子大学 100周年記念事業基金寄附金領収書」を発送しております。

この領収書は確定申告時に必要となりますので、大切に保管いただきますようお願いいたします。

また、ご寄附いただいた方で、領収書がまだ届いていない方は、お手数ですが、100周年記念事業推進室までご連絡いただきますようお願いいたします。

## お問い合わせ先

福岡女子大学100周年記念事業基金(募金)に関すること

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1-1-1 100周年記念事業推進室

TEL 092-692-3200 FAX 092-661-2420 Email 100th-bokin@fwu.ac.jp

## 寄附者ご芳名

福岡女子大学100周年記念事業の趣旨に賛同いただき、多大なご協力・ご支援を賜り、誠にありがとうございます。

2022年8月1日から2022年12月31日までにご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます。

ご芳名のご公表を希望されない方は掲載しておりません。

今後とも福岡女子大学100周年記念事業への温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

\*本学ホームページにおいて、寄附開始以降、ご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載しております(ご公表を希望されない方を除く)

### 1

お名前・寄附金額の掲載についてご了解いただいたご寄附者様

(寄附金額別、五十音順にて掲載させていただきます。カッコ内の数字は累計寄附金額です)

#### 500万円

ウーフランキー 様

#### 10万円

中ノ瀬 順子 様

#### 2万円

森 詩央里 様

#### 50万円

池野 京子 様 (100万円)

宮崎 輝恵 様 (100万円)

渡辺 浩志 様 (250万円)

#### 5万円

石橋 陽子 様 (6万円)

岡本 恵 様 (26万円)

重富 美紀 様 (25万円)

#### 1万円

植松 志津子 様

高橋 明子 様

#### 25万円

山村 愛子 様

### 2

お名前の掲載についてご了解いただいたご寄附者様

(五十音順にて掲載させていただきます。カッコ内の数字は累計寄附回数です)

あ 上野 富美子 様

梅林建設株式会社 様

大守 玲子 様 (4)

か 金光 真美 様 (3)

鎌田 迪貞 様 (2)

小杉 美加代 様

さ 株式会社サニックス・

ソフトウェア・デザイン 様

株式会社システム

オーディット 様

嶋田 美智子 様 (2)

た TIS西日本株式会社 様

富井 真理子 様

な 西日本電線株式会社 様

森山 圭 様 (2)

は 濱地 洋子 様

羽毛 洋子 様

藤本 好子 様 (3)

渕上 和子 様

ま 松尾建設株式会社 様 (2)

森山 圭 様

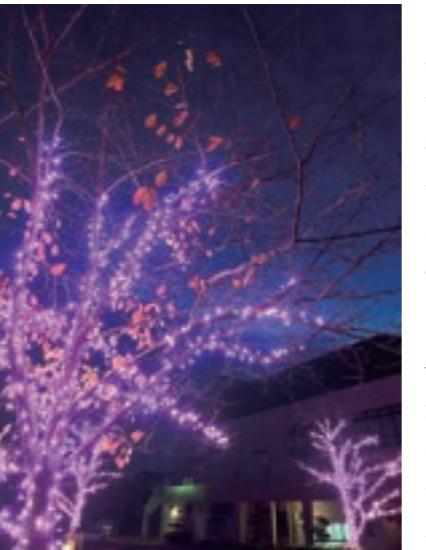
は 山口 逸子 様 (3)

# 編|纂|の|寄|り|道

## 時代の変化と共に 変化した 福女大生の恋愛事情



国際教養学科 2年  
古賀 瑛子さん



近年コロナ禍の影響もあり人と関わる機会が少なくなっています。そんな現代では、自由に恋愛をして社会人になってから結婚する人が多いと思います。またその出会いの方も、アプリやバイト先で出会うなど様々です。女専25回生(昭和25年3月卒)のインタビューによると、授業参観には息子の花嫁候補を探す母親が参加し、卒業する頃にはもう旦那さんがいるというような風潮があったようです。そのお相手の多くは九州大学卒業の医師の方だったようです。時代の変化と共に男女間の交際の“形”は大きく変わったようです。しかし、時代は変化しても男女関係だけでなくもちろん友人や先輩、先生など色々な“出会い”はいつまでも大事にしていきたいものです。

## 女専を選んだ 親たちが 込めた想い



国際教養学科 3年  
藤井 葵さん



図書室で学ぶ女専生(『開校十週年記念帖』より)



実習の様子(『開校十週年記念帖』より)